第2回かながわ感動介護大賞

～ありがとうを届けたい～

受賞作品

平成25年11月11日

かながわ感動介護大賞実行委員会

目　　次

〇第２回かながわ感動介護大賞　応募作品の総評　……１

〇受賞作品

最優秀賞　入浴回数１０００回の偉業に感謝！　……２

優秀賞　至れり尽くせり　……４

感謝　……６

暗闇の明るい光　……８

言葉の力　……10

ヘルパーさんありがとう　……12

▽第2回かながわ感動介護大賞　応募作品の総評△

第2回かながわ感動大賞・感動介護エピソードに29件の応募をいただきました。今年度の特徴は、介護サービスを利用しているご本人様からの応募が16件、全体の半数以上であった点が特筆されると思います。

ご本人様からの応募作品には、介護従事者等への感謝の言葉だけでなく、加齢に伴う様々な障害を抱えながらも、高齢期を精いっぱい生きている一人ひとりの生活の様子や、暮らしぶりが伝わってきました。また、ご家族からの作品には、突然の介護問題に戸惑いながらも、現実を受け入れ、新しい可能性を発見していく姿が垣間見られました。

この作品集をご覧になる皆様の年代は様々だと思います。特に若い人たちには、一つひとつの作品を通して、社会や家族のこと、そして自分自身のこれからの生き方について考える機会になれば幸いです。

かながわ感動介護大賞表彰選考会座長　峯尾　武巳

最優秀賞

「入浴回数１０００回の偉業に感謝！」

棚井　宴子　様

感動介護を行った職員

社会福祉法人創生会　あだちホーム　伊藤　和幸　さん
（訪問入浴介護）

「入浴回数１０００回おめでとう！」

昨年８月に訪問入浴回数１０００回を達成し、あだちホーム入浴サービスさんより父の偉業達成のお祝いの賞状と記念のタオルをいただいた。

平成13年5月16日に初めて訪問入浴を利用させていただいてから、平成24年8月10日まで入浴回数１０００回とのことだった。

利用者の中で１番の入浴回数らしい。

父がくも膜下出血で倒れて、在宅生活を始めてから12年以上になる。父は麻痺の後遺症が残り、全介助の要介護状態５である。

週に２日の入浴は父にとって、そして家族にとっても安らぎの場だ。

裸になることに抵抗のあった父は、裸になると、拘縮している身体に余計な力が入ってしまう。

カズさんと出会って力を入れずリラックスして入浴することが可能となった。

同じ担当者を希望してから10年ずっと変わらぬ笑顔と丁寧な仕事ぶり、そしてたくましい腕で父をひ

ょいと持ち上げ、絶対的な安心感がある。
1時間かけて丁寧にそして体調にあわせた、ゆったりとした入浴介護を心掛けてくれている。
父の様子を細部まで聞き取った上で入浴させてくれる。
おかげで父の肌はツルツルピカピカ！父はまるで病気を患っていないかのような若い肌を保っている。
私は介護に厳しい方だと自負しているが、厳しい私という家族の目にも言うことなし！のあだちホームは、在宅当初から一度も業者を変えなく続けて利用させていただいている。
現在も父は記録更新中。
感謝！感謝！

▽講評△

今回の応募作品で、唯一「訪問入浴」事業についての作品でした。訪問入浴サービスは、介護職員と利用者さんとの関わりが密で、比較的長時間のサービス提供のため、双方の信頼関係がとても重要なサービスだと思います。そんな中で、10年以上１０００回も同じ事業者、同じ職員の対応を希望されていることは、利用者さんのサービスに対する大きな信頼を感じることができる一編でした。まさに「プロ」としての仕事を感じさせる作品でした。

優秀賞

「至れり尽くせり」

近藤　茂代　様

感動介護を行った事業所

株式会社グッディ　デイサービスセンター　グッディ

昨年の十一月、九十歳の母が脳梗塞で入院。退院後、週一回の「グッデイ」への通所が決まりました。多少の不安がありましたが、施設長の合津さんの明るい笑顔に救われました。

朝、手を振って母を見送るたびに、母に手を振られて学校に行っていたことを懐かしく思い出します。母の部屋の掃除が終わり、もうそろそろ帰ってくる頃だと思うたびに、母も同じように私の帰りを待っていてくれたのだろうと心が温かくなります。

「お帰り！今日はどうだった？」と聞くと、母は毎回、笑顔で「至れり尽くせり！」と答えます。本当に親切にしていただいているのが伝わってきます。

「今日は公園に行って、滑り台を滑ったよ。八十年ぶりだったよ。」と嬉しそうに話す母。

「爪を切ってもらったよ。足の巻き爪も上手に切ってくれたよ。」「マッサージしてもらったよ。」と気持ちよさそうに話す母。

「畑に種を蒔いたよ。」「トマトがいっぱいなったよ。なすを収穫したよ。」と得意そうに話す母。

「いっぱい体操したよ。」「手品を習ったよ。」「編み物したよ。」等々、グッデイに行かなければ、

経験できなかったことばかりです。
また、グッデイではその日の活動を写真に撮ってノートに貼ってくれています。至れり尽くせりです。これを見るのも楽しみで、見ながら母との会話も弾みます。友人にもよく見せますが、皆、感動して話が盛り上がります。
脳梗塞になったお陰で、グッデイに行くようになり、母の生活も、母との会話も豊かになった気がします。脳梗塞に感謝かな…。

▽講評△

学校に通うこと、デイサービスに通うこと、それぞれ年代は大きく違うし、行った先でやることも違う。しかし、行き先は違っても、送られる側の緊張感と送り出す側の心配には、たいへん似通った思いがあるのだと伝わってきました。
そして、それぞれの気持ちをデイサービスセンターの合津さんはよく掴んでいるのでしょう。デイに通う人の楽しみと家族の安心を生み出す、すばらしい支えをこれからも提供していってください。

優秀賞

「感謝」

齋藤　絹子　様

感動介護を行った事業所

有限会社　セルフビーイング　デイハウスしおり

一人でいると、こんな不幸はないと思いがちですが、顔も型も違いますが、心は一緒です。
皆色々乗り越えて今があると思います。
好きで病気になったわけでもなく、今迄気づけなかったこと、気づけたこと、
若いスタッフにも逢えなかったこと。
食事、皆一緒に食べるし、楽しくゲームを色々考えてくださったり、そう思うと嬉しくて、嬉しくて、
また一人ひとりに気づかいをしてくださる気持ちに、いつもいつも感謝しています。
介護というのは、甘えてやってもらい、できることは、やっていくのだと思います。
本当にいい出逢いをして、心が成長したと思います。
皆様、ありがとうございます。

▽講評△

アメリカの心理学者エリクソンは、高齢期の発達課題を「絶望と統合」だといいました。高齢期は役割の喪失等、失うものも多いですが、人生の知恵が結集する時期でもあります。そして、この方の作品から幾つになっても成長し続ける、人間の可能性を見た気がします。

文章としてはシンプルかもしれませんが、日々の暮らしの中で、思いついたことをメモしたような、ほのぼのとした素朴な内容に感銘を受けました。

この方のように年を取れたら素敵だな、と思った作品でした。

優秀賞

「暗闇の明るい光」

内藤　素子　様

感動介護を行った職員

社会福祉法人　興寿会　居宅介護支援事業所　興寿苑　今西　弘美　さん
株式会社　あんず　ケアステーション杏の実　今井　育代　さん

２００６年５月に母が胆管ガンに倒れ、私は急遽親の介護生活に入った。私は当時離職したばかりでそれまで記者として国際社会を飛び回っていた生活とは、天と地ほどの差があった。

母は闘病生活で体力もかなり落ち、動作も緩慢になっていた。

デジタル化というどんどん変化する世の中と最近の若手の活躍に焦りを感じながらも、親の介護生活という自分の現実と今までの実力社会との違いに打ちのめされる毎日だった。

親と同居しているということで自分の家に生まれた娘としての義務は精神的にも肉体的にも大変きつかった。

介護保険で介護ベッドを借りて母親の寝室に置き、私は、母親とこれからの母の生活と自分の生活を話し合った時のことである。

自分の可能な範囲しか介護できない私は、老衰で若い頃のようにテキパキとした機敏な生活態度ができない母にイライラし、八つ当たりして焦りのあまり母親のおでこを思い切り叩いてしまったのである。

気を取り直して目の前に立っている母親をよく見てみると、おでこに大きな青いたんこぶがまるまると膨らみ始めたではないか。

人に残酷なことをしたことが今までなかった私は、自分のしたことにショックを受け、恐る恐る夜遅くお世話になっている社会福祉法人・興寿会に電話をかけた。

電話に出た職員の対応は落ち着いて明るく、私の動揺を丁寧に聞き入れてくれた。

暗闇にともった明るい家庭的な光を、あの時ほど見たことがない。

次の日にはジャパンケアサービス東日本（現在ケアステーション杏の実）のヘルパーさんたちにも私のできごとが知らされており、家に介護に来たヘルパーの今井育代さんは、明るい笑顔で「私は介護の現場が好き。私たちに何でも聞いて」と言い、取り乱した私を励ましてくれたのである。

介護の生活は細く物事をつないでいく生活だ。

福祉の仕事に従事する人の明るい体制がなければ、私の生活は荒れ果てていただろう。

▽講評△

家族の病気から離職を余儀なくされ、突然の介護者生活に入った作者が、その親御さんとの葛藤の中で、ケアマネやヘルパーの何気ない受容的な言葉や態度に救われ、また介護が如何に専門家の支えを必要とするかを、タッチよくきりりと描いた作品です。国際社会での記者生活とは、天と地ほどの差があったというその落差感を汲取り対応されたヘルパーさんがたは、明るい笑顔を絶やさず、介護や福祉の仕事は天職のようだと、教えてくださいました。

優秀賞

「言葉の力」

匿名希望

感動介護を行った事業所

社会福祉法人　清琉会　玉川グリーンホーム

父は83歳です。脳梗塞と肺炎を患い、要介護5の認定となり、家の中だけの生活を約2年。母の介護疲れをきっかけに公共の介護サービスを受けることにしました。

ケアマネジャーさんの外部との接触の様々な提案や励ましに、父は聞く耳を持ちませんでしたが、母への気遣いから、入浴サービス、訪問看護、掃除のサービスは受けるようになりました。

そんな中、ケアマネジャーさんの自宅でのリハビリをしてみてはという励ましに同意し、自宅リハビリが始まりました。

リハビリの先生はハツラツとしていて、リハビリをすれば必ず筋力がアップするとの確信をもった言葉は、父を少しずつ前向きにしてくれました。

目標を家族旅行に行くと定め、毎回のリハビリと宿題である毎日の個人のリハビリをまじめにこなすと、先生は毎回、その成果を誉めてくださり、しかも目をキラキラさせながら、心からの誉め言葉に、父は喜びと目標に近づいているという手ごたえと、意欲が出てきました。

父の筋力は家の周りを一回り散歩できる程にまでになり、目標だった家族旅行（子供夫婦三組）に、十

カ月後に行くことができました。

そしてデイサービスも、年配者のただの集まりではなく、学ぶこともできるとの話に、父は書道への意欲をもち始め、実際に出かけてゆくこともできました。

「あのお父さんがね～」と信じられない父の変化に母と二人でよく話しています。

頑なだった父がケアマネジャーさんやリハビリの先生の積極的で親切な、そして父の尊厳を認めてのあたたかい言葉の積み重ねが、父の心を少しずつ柔らかくしてくださったと思います。

私の愛読書にも「賢い者の舌は、人を癒す」とあるように、毎回、そういう言葉をかけてくださった皆さまに感謝するとともに、言葉の持つ力に感動しています。

▽講評△

人に言われた些細な言葉で勇気づけられたり、気を落とした経験は誰にでもあることです。お互いの信頼関係や相手のことを大切に思いやる気持ち、実践や経験が示す援助技術があるからこそ、同じ言葉でも大きな力になり、意味あるものになり、言葉が相手の心に響くものになるはずです。ケアマネジャーさんやリハビリの先生の熱心でご利用者を尊ぶ励ましによって、やる気が引き出され目標を達成させ、生活に変化をもたらしたことに感動されたことでしょう。

優秀賞

「ヘルパーさんありがとう」

匿名希望

感動介護を行った職員

社会福祉法人　清琉会　玉川グリーンホーム　居附　康世　さん

近所の方や民生委員さんから勧められてヘルパーを利用することにしました。

初めは朝早くから家に来て、「デイケアに行きましょう。」と起こされ、支度して、休みたい時も、渋々出掛けざるをえなくなりました。

両足にむくみがあるため、医師からの指示があり、毎朝包帯を巻きに来たりしました。

薬の飲み忘れがないかチェックもありました。

汚れた洗濯物をどんどん洗って、片づけてくれました。

買い物に一緒に出かけたときに帰りの１００ｍの上り坂で、動けなくなった時も、そばにいて荷物を持ちながら声をかけてくれ、動けるまで待っていただき、支えられて家に帰ったこともありました。

戸惑うこともありましたが、自宅で一人での生活を続けられるように日々の生活の中、いろいろと手伝ってくれました。今はとても感謝しています。

高血圧の薬も飲み忘れがなくなり、両足も包帯を巻いてもらうことにより、パンパンだった足のむくみが良くなり歩きやすくなり、暮らしやすくなっています。

買物を代行してもらい、自分で調理をしたり、一緒に調理したりしています。いまでは安心して自宅での生活が続けられるとの思いが強くあります。
いつもありがとう。そして、これからもよろしく。

▽講評△

ヘルパー業務は日々の生活の中で連続的に行われるため、それら一つひとつを意識し、眼を向けていくのは利用者の側からはとても難しいことだと思います。この作品では、そうした日々のヘルパー業務が具体的に記述され、そこでの対応について利用者や家族がどのような気持ちを持ったかが良く書かれている作品であったと思いました。生活の中で、ヘルパー業務の具体的な内容やその意味を考えることができる作品でした。

かながわ感動介護大賞表彰選考会委員名簿　（○…座長）

東海大学　准教授	東　奈美
特定非営利活動法人 神奈川県介護支援専門員協会　副理事長	石田　貢一
社団法人　神奈川県社会福祉士会 福祉サービス第三者評価事業運営委員会　副委員長	髙島さち子
神奈川県介護福祉士養成校連絡協議会　会長	豊田　宗裕
神奈川県立保健福祉大学　教授	○峯尾　武巳